# 2022 年度

# 慶應義塾大学体育研究所

# 基盤研究報告書

慶應義塾大学体育研究所

# 慶應義塾大学体育研究所・公社）全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム

# 「ルーブリックの活用から体育実技の目的と評価を考える」

# 実施報告

## ～はじめに～

2022 年 12 月 10 日（土）15 : 00-17 : 00、慶應義塾大学日吉キャンパスにて（Zoom Meeting を用いたハイブリット形式）標記シンポジウムを開催した。参加者は 53 名（シンポジストらを含む会場参加 17 名、オンライン参加 36 名）であった。

本シンポジウムは、公社）全国大学体育連合関東支部の支援を得て、大学体育および大学教育に関する今日的課題を議論する場として、2014 年より開催して来た。コロナ禍を迎え、社会および大学には多くの変化が生じ、大学体育の現場も幾多の困難を経験した。そうした中、昨年度（2021 年度）は「オンライン（遠隔）体育実技における成績評価を考える」というテーマで、成績評価方法の実態調査を基に議論をした。そして、以下の課題が見えた。

1. 大学体育における「アセスメントポリシー」としての「評価の厳格化」という点から組織的取り組み・教員の裁量・観点の比率の公開などに課題がある
2. オンライン授業における体育実技の目的と評価の関係について議論することが重要である

これらの課題を基軸として、本年度も引き続き議論の場を持ちたいと考えた。体育実技授業における目的と成績評価の視点から、「形成的評価」としてルーブリックやポートフォリオの活用が、例えば、中等教育の現場では重要視されている。そこで、本年度は「体育実技の評価におけるルーブリック」の活用を鍵として、ポストコロナを見据えた大学教養体育の使命・役割（目的）とその評価の在り方について議論を進めてみたい。体育実技の形成的評価としてルーブリックをどう捉えるか？この議論は重要であると考える。そして、その議論を深めつつ、大学において評価の厳格化を進めるプロセスと大学体育の目的や学修成果の関係性について考え、さらには、ポストコロナの時代の大学体育の意義や責務を探っていきたいと考えた。

**発表の内容はアーカイブ映像およびパンフレットの要旨（巻末）を参照ください。**
**シンポジスト発表映像 URL：**
https://drive.google.com/drive/folders/1L8wHYmVXbqxsic67WVp3IzGURnSJ3hHt?usp=sharing

## ～ディスカッションの要点および総括～

コーディネーター：村山光義（慶應義塾大学体育研究所）

**趣旨説明:**

2008 年の中央教育審議会答申「学士過程教育の構築に向けて」では、学士力の保証の一課題として「厳格な成績評価」への取り組みの必要性が示されており、大学においては「個々の教員の裁量に依存し組織的取り組みが弱い」と指摘されている。一方、我々は 2021 年度のシンポジウム：「オンライン（遠隔）体育実技における成績評価を考える」において、大学体育実技における成績評価の実態を検討し、評価方法が教員に一任されているケースがあることや遠隔授業を機に目標と評価方法の在り方などについてさらなる議論が必要であることを指摘した。こうした「厳格な成績評価」に向けた検討の継続として、本シンポジウムでは、体育実技の評価における「ルーブリック」の活用を鍵として議論を進めることとした。「ルーブリック」は、形成的評価として目標（規準）の達成度（基準）を段階的に文章化して示す手法であり、中等教育の現場では積極的に用いられているものである。しかし、高等教育での活用は必ずしも活発ではなく、特に体育実技においては身近なものとなっていない。そこで今回、ルーブリックの活用の実態・事例の報告、ルーブリックの意義や効果の理論などをふまえ、評価の厳格化を進める議論を深めつつ、大学体育の目的や学修成果の関係性について考え、さらには、ポストコロナの時代の大学体育の意義や責務を探っていきたいと考えた。

**シンポジスト報告の概要**

**１.『大学体育実技授業におけるルーブリック活用に関する調査報告』**

**東原綾子（慶應義塾大学体育研究所）**

大学体育実技におけるルーブリック評価については、認知度・活用実績・検討事例などの点で情報が十分ではない。そこで我々慶應義塾大学体育研究所は全国大学体育連合関東支部の協力を得て、ルーブリックの活用事例について支部の会員を対象にアンケート調査を実施した。その内容について、東原氏より報告をした。

大学体育実技におけるルーブリックの活用例は 42 件中 7 件で、その内組織的な活用は 4 例と少なかった。未活用群において、94.1%が「ルーブリックを知っている」と回答し、「活用を検討している」が 44.1%、「講義では活用している」が 26.5%あったが、「導入は難しい（32.4%）」「必要ない(5.9%)」という消極的な意見もあった。さらに、ルーブリックへの学内・体育組織の取り組みについては、「議論は活用でない」「遅れている」「関心が低い」などの消極的な現状を指摘する回答とともに、「今後検討したい」「共通理解を得て検討」「活用事例を一助に進めたい」といった前向きな回答もあった。また、導入を検討すべきではあるが、ルーブリックへの理解不足や教員間の認識の差、統一的な内容を作成する難しさなど、議論が進めにくい要因を指摘する回答に加え、ルーブリックの客観性や意義は認めつつ、教

員や授業内容の多様性から、それのみの評価への疑問、困難性を指摘する回答があった。本調査から、体育実技授業におけるルーブリック活用事例は少なく、限定的であり、今後の活用に前向きな意見もある反面、疑問や懸念を指摘する意見があるという実態を把握することができた。従って、ルーブリック活用の議論を進めるためには、大学体育実技におけるルーブリック導入事例および形成的評価としてのルーブリック導入の意義・課題の整理を共有し、大学体育実技の教育目標に沿ったルーブリックの在り方を探る必要があると考えられた。

なお、本調査結果をもとに、ルーブリックの活用例について、以下の長谷川氏、前鼻氏に事例報告をいただくこととなった。

**２.『体育実技におけるルーブリック案の作成と試行～現状と課題～』**

**長谷川望（東京家政大学家政学部）**

長谷川氏からはルーブリックを共通の評価方法として導入した事例として、その背景や試行錯誤の過程を中心に報告をいただいた。

共通教育科目「からだとスポーツ」として複数教員により様々な種目（全 42 クラス）を展開。その到達目標は「生涯スポーツへの導入」であり、楽しい経験を継続的なスポーツキャリアにつなげるものである。その下位目標は①体力の維持増進、健康管理への習慣化に必要な知識や態度の獲得、②運動・スポーツの楽しさの再認識と心身への効果の実感、③他者とのコミュニケーションや社会的規範を学ぶ、であった。成績評価は体力運動能力の優劣ではなく、積極的な参加態度と健康管理能力を重視し、平常点 60%、担当教員の独自設定評価 40%で構成していた。コロナ禍によるオンデマンド授業において、全教員間で最低基準の統一を申し合わせて合否判定で評価を実施したが、教員間で評価に差が生じたことを課題として、対面授業再開に際し再度評価基準の厳格化に取り組み、統一の評価基準としてルーブリックの作成を試行した。報告ではその作成案の修正過程について説明がなされた。まず①②③の目標に対する基準作成を試み、次に平常点の得点化を対応させ、最終的に評価規準について平常点に加え 8 観点を設定し、評価基準を 5 段階として配点を決め、SABCD を計算するものとなった。

これらの作成から運用の課題としては以下の点が挙げられた。

１）教員間および種目間のバラつきが出ないような項目の作成が難しい

２）学生がどのように努力すればよいかの指針としての具体的な提示方法が難しい

３）担当教員の独自性との関連（独自性が出しにくくなる）

４）学期の最初に学生、教員に示して実施ができていない（中間評価なども）

５）ルーブリックの妥当性、信頼性の検討

６）本学体育の目標との関連（ルーブリック評価でよいのか）

本報告は、組織的にルーブリックの運用を開始した事例として貴重な情報を含み、また、３つの到達目標が明確である点は大変重要であり、参考となる内容であった。

**３.『ルーブリックの運用にみたロードマップ』　　前鼻啓史（目白大学心理学部）**

前鼻氏からは、組織的なルーブリック導入から 3 年間の経験をもとに、その実装過程から効果検証までの事例として、ルーブリックに関する学術研究を含めて報告をいただいた。

まず、ルーブリック運用の実装過程を＜コンテンツ整備＞と＜科目での運用＞に分け、前者について１）シラバスへの反映と合理的配慮への準備、２）アセスメントシートの作成、３）成績計算シートの作成、後者として４）セルフアセスメント、５）ピア・フィードバックについて説明がなされた。1）については、ルーブリック評価の実施（採点内訳の開示含む）を明記、ルーブリック内容のわかり易さ、授業形態への適応、単元の流れや授業スケジュールからみた現実性、教員間で評価基準の合意、に留意したシラバスへの反映による均一性の維持をしつつ、合理的配慮による教員と学生間の合意の重要性が述べられた。２）については、学生自身が学習状況に見合った評価を随時振り返えれるセルフ・アセスメントシートを「健康管理」「創意工夫」「意欲」「向上心」「協調性」「省察性・自己評価」を規準としその基準を 4 段階に設定し作成した。さらに、教員用にそれらを評価採点するアセスメントシートを紙面やタブレットで準備した。教員は全ての評価項目を毎時間評価するのではなく、単元の内容をもとに評価項目を選択し評価する。３）はアセスメントシートを集計する成績計算シートの活用のことであり、評価項目別に換算公式の設定し、自動的に合計得点と成績が算出される。主観的な評価に客観性の観点を補填することで「評価の透明性」を高めることが重要と考えられる。

続いて、これらを実際の授業で運用する上で、４）として学生のセルフ・アセスメントシートの振り返りによる課題設定の意識づけ、学生同士のピア・アセスメントなどによるアクティブラーニングとしての成果も期待される。さらに５）として、教員からのピア・フィードバックにより、学生による自己評価と教員による評価とのギャップを埋めることができ、かつ学生の学習観をはじめ自己肯定感・有能感のアップデートを促していくことが可能と考えられる。

次に、ルーブリック実践の効果検証として、ピア・フィードバックの有無による教育効果の比較研究の紹介がなされた。ピア・フィードバックを受けることで、教員評価（実際の成績の素点）は 7 回目終了時点から 15 回目にかけて優位に上昇し、学生による自己評価との差も男子で小さくなった。このことから、ルーブリックを単なる評価ツールとしてではなく「教育ガイド」として活用することが重要といえる。また、近年増加する成績照会への対応として、ルーブリック評価は教員側の一貫性があり透明性が高い客観的根拠の提供を可能にし、照会側も教員の恣意的な評価によって不利益を被っているわけではないと理解することが容易となる。このことは、学士力の保証、教員自身のティーチング・フィロソフィーなどを守ることに繋がる。

最後に、必要なタスクと懸念事項に関して言及があった。時間と労力といった実質的側面における教員が果たすべきタスクが増加する点について、ルーブリックの性質や要点を抑え、緻密な授業プランニングなどのタスクの再構築によって教員の職能開発にも寄与する可能性が指摘された。懸念事項としては、1）学習者がルーブリックを正しく理解し活用す

るために、ガイダンス時には具体的な活用例を提示するなどの丁寧な説明が必須になる。2）評価基準の外にある採点不可能な実在の姿について、評価に反映すべきか吟味・検討が必要、3）評価の透明性が客観主義を助長する可能性があり、素点を算出しない科目などの評価方法をとの関係を考える必要がある、4）学習者自身の独自の学習観（尺度）の醸成を阻害することなく、知的好奇心を尊重しつつアセスメントポリシーに沿った学習観の醸成を志向する必要がある、といった指摘がなされた。

本報告は、評価シートの活用やフィードバックなどルーブリックの運用における具体的な組織的システムに関する情報とその研究成果も紹介され大変参考となるものであった。タスクと懸念事項に関する意見も示唆に富むものであったが、後の全体ディスカッションで十分に深められなかった点が反省点である。

**4.『大学体育実技におけるルーブリックの活用とアセスメントのあり方』**

**佐藤豊（桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部）**

佐藤氏からは、文部科学省にて中学・高等学校の新しい学習指導要領の構築に携わった経歴と学習評価に関する研究実績に基づき、初等・中等教育で 20 年以上にわたって進められてきている「指導と評価の一体化」について解説いただくとともに、大学での体育実技に求められる意義や目的の視点から、ルーブリックの在り方について報告をいただいた。

まず、大学体育で何を教えるのか、という根本的な課題に初等・中等教育における体育の学習指導要領の組み立てを踏まえ、体育という学問の価値、大学改革に貢献する体育が必要とされてきた点の解説がなされた。つまり、初等・中等教育では、体育実技を含む体育科・保健体育科は、学習指導要領において 12 年間にわたり 2 年間ごとに、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の 3 つの資質・能力に応じた体系的な指導内容が示されている。2016 年の学習指導要領改訂の方向性では、新たな時代に必要となる資質・能力の育成と学習評価の充実が掲げられ、何ができるようになるか（＝大学におけるディプロマ・ポリシー）、何を学ぶか（＝大学におけるカリキュラム・ポリシー）、どのように学ぶか（＝アクティブ・ラーニング）が重視され、大学においても各大学のポリシーに貢献する形で同様に適用できる。そして、新たなコンピテンシーの評価法の開発として、従来の標準化のテストから標準化によらない（オルタナティブな）パフォーマンス評価が重視され、これに親和性のある手法の 1 つがルーブリックである。体育学習の「わかる」と「できる」について、知識の入力と表現としての出力の対応関係を示し、学んだことを思考・判断して体や行動で示したものを評価する必要があり、知識、技能、思考力、判断力、表現力等の評価で用いられているルーブリック評価表のポイントについても解説がなされた。

続いて大学体育における指導と評価の検討として、体育系大学でのルーブリック設計の具体例について解説がなされた。大学の教育目標の全体像を共有し、各科目（体育）において重点を置く資質・能力をカリキュラムマップとして作成し、ディプロマ・ポリシーから見た指導内容と評価指標の検討を認知的領域、情意的領域、技能的領域の別に行った。その際、

学習指導要領、ブルームによる分類、到達目標の例、対象＋動詞表現の例を参照して作成がなされた。次に、単元別にどのような指導を行っていくか、どのタイミングで評価を行うか、といった俯瞰的な構造図を作成する実例について解説があった。そして最後に、具体的なルーブリック表の作成として、評価規準を判断する際の「学びの姿」となる目安の例について、解説がなされた。

最後に、まとめとして授業改善のプロセスについて説明がなされた。まず設計力として、DP に基づく体育実技の目標設定、単位数で指導可能な指導内容の特定、全ての学生が到達可能な授業設計が必要である。実践力としてはマネジメントなどの基本的教授技術の遂行、状況に応じた手立てや指導内容の修正が求められる。そして、省察力として学習評価のフィードバック、授業評価の分析を行う必要がある。これらにルーブリックが有効に作用することとなるが、本シンポジウムを参考に各教員が取り組んでいくことが望まれる。

本報告は、初等・中等教育の現場で積み上げられてきた教育評価の成果の解説として、我々大学教員も参照すべきものであり、多岐にわたる理論と事例から学ぶ必要性を痛感させられるものであった。

**ディスカッションの概要**

時間的な制約で、全体のディスカッションには十分な時間がとれなかったが、ルーブリックの活用が十分に進んでいない状況を踏まえ、活用を促進する視点から、いくつか課題を浮き彫りにする意見交換を行った。

フロアからは「ルーブリックを使おうとした際に、教員のトレーニングが必要か？必要であればどんなことをすればよいか（寺岡氏・日本体育大学）」「紹介されたルーブリックに取り組もうとした際に、20 人ほどの多様なレベルの学生を評価しきれるか、難しさを感じる（吉川氏・青森大学）」という質問・意見があった。つまり、教員側にルーブリックを導入する際のハードルが高いといった所感があり、個人のレベルではどのように取り組み始めるべきか、といった不安や疑問があり、活用が進まない原因の一つとなっているようである。これに対し前鼻氏からは、「ルーブリックの設計段階で、積み上げられてきた多くの教育成果から敢えて基本的なものに下げ、まず評価すべき観点を新任者にもわかりやすい形として提示した」「毎回すべての観点を見るわけはなく、観点を絞り焦点化して行う。最初は難しく感じるが、慣れて来る」という回答があった。また佐藤氏からは「観察評価は難しい。しかし、高校の 60 人授業において最初は見きれないが、一つの観点で 1 回全員を見る、評価の低い者をまず抑えていく、といったことを続けることで複数観点の組み合わせパターンの認知が可能となってくる」という回答があった。つまり、一定の期間は試行錯誤を繰り返して、観察評価に慣れていく過程を踏む必要性があるということは言えるであろう。また、組織的な取り組みを開始する上では、まず目標に照らし合わせてどのような評価観点を持つかについて、共通理解を得ることが重要であることも示された。

一方、コーディネーターから「各観点の総和として成績評価の評定を決めていくことで体

育の目標や大学のディプロマ・ポリシーを達成することになるかという点には議論があると思われる。採点システムを構築する上で、組織的なコンセンサスが必要」という意見を述べた。こうした課題を引き続き検討していく必要性をなげかけ、各シンポジストから以下のようなまとめの意見をもらいディスカッションを終えた。

東原氏：ルーブリックを作成し活用することは、評価内容の道標になり、若手教員の育成に有用。運用のためにトレーニングが必要であると思われるので自分自身前向きに取り組んでいきたい。

長谷川氏：大学における到達目標を達成すれば合否で判定するという考えもできる。評価観点は絞り込んでいく必要があるかもしれない。コロナ禍で学生へのフィードバックに努めた経験を踏まえると、対面でも観点を押さえて評価していくことは可能な気がするのでチャレンジしていきたい。

前鼻氏：本学で構築した評価システムは現在 best ではないかもしれないが better ではあると考えている。今は苦労しながらベンチマークを作り、より良いシステムに積み上げていく段階。深い穴を掘ろうとすれば広い穴を掘ることが大事だと感じ、今後も議論をしたい。

佐藤氏：システムを導入することは簡単で、その運用が難しい。苦労しても導入によって学生の変化が起きて「やってよかったな」という実感を得ることで続けられる。また文字情報のフィードバックには限界もあるので直接話すことや他の指針を参照して修正しながら運用することが大切。

**まとめとして**

大学体育実技において、どんな目標をもって授業行い、どのように評価するかという点ついてルーブリックの具体的な運用事例を軸に議論をした。資質・能力の育成の観点別評価と合否判定を含む最終的な評定ありかたの関係は別の議論で、かつ容易に答えが出せるものではないこと感じられた。しかし、ルーブリックの活用を含む授業の再構築に取り組むことが、教員の能力開発・資質向上のための新しいトレーニングの一つになる可能性がある。どんな目標を立て、それを評価・フィードバックして、どのように学生を育てていくか、今後も引き続き議論をしたいと考える。

## ～事後アンケートの回答内容～

シンポジウム終了後、アンケートを実施した。以下にその内容を記載する。

---

貴重な勉強の場となりました。ルーブリックの実践事例は大変貴重なものでした。経営が厳しい地方の小規模大学ですので、未だ E-ポートフォリオなど学生の学習支援のシステムも整備されておらず、Wi-Fi 環境すら整っておりません。ルーブリックの活用はやはり IT 化とセットで進めていかないと、余計な手間が増えてしまい授業の邪魔になりかねないと感じました。実技指導の現場に紙とペンを持ち歩くことと、それをあらためてデータとして入力したり、学生にフィードバックしたり…その作業が果たして、良い学びにつながるかどうか疑問が残ります。大学の経営サイドとしては学習成果の可視化や評価の厳格化という課題クリアに向けて改革を進めたいところでしょうけども、まだまだ現場の理解が足りないと感じています。ただ、今回のシンポジウムをきっかけに一歩踏み出してみようかと前向きな気持ちになれました。ありがとうございました。

---

詳細な事例に基づく情報提供が多く、とても有益なシンポジウムであったと感じました。ルーブリック評価は多くの大学で求められてくるものだと思いますので、これで終わりではなく、失敗事例なども含め検討する機会があると良いように感じました。非常勤講師も含めた授業マネジメントにおいてルーブリック評価の導入は説明が難しいと感じております。このようなシンポジウムなどで広く発信することは責任者の負担を軽減することに繋がると思いますので、継続的な取り組みがされることを期待しています。ありがとうございました。

---

ありがとうございました。それぞれ、先生方が工夫して授業を展開、評価されていることがわかり、参考になりました。

大学のディプロマ・ポリシーにより、授業目的が異なることもあり、多少当てはまらない部分もありますが、それも含めて参考になりました。ただ、そこまで丁寧な対応ができる時間があるかどうか、非常勤の先生方への負担など、課題も感じました。ありがとうございました。

---

貴重なご発表いただきありがとうございました。常々体育実技授業でのルーブリック活用方法に悩みを抱えておりましたが、今回の発表にて参考にできる点が多々ございました。使いこなすにはトレーニング（経験）が必要ですので、簡単なものから先ずは実践していきたいと考えます。

---

　現在、体育実技教科へのルーブリック評価導入を検討しており、大変参考になる内容でした。

---

　登壇の皆様ありがとうございました。実技科目でのルーブリック作成における貴重な資料と研修となりました。専任と非常勤、高齢教員に対する複雑な評価への要望、大人数の学生への評価、精神的な疾患を持っている学生の対応などでルーブリックの可否など問題が多いと感じておりました。困難な状況や実際での活用事例などの情報共有できたことに感謝し本務校でも活用していきたいと思います。

　シンポジウム開催のスタッフの皆様に感謝申し上げます。

---

本日はオンラインにて参加させていただきありがとうございました。大学体育という授業科目の特性上，実技や実習に取り組んだ学生をどう評価するかは，教員と学生の双方にとって，他の講義系科目以上に重要なものと感じています。良くも悪くも，出席していたら OK，積極的に取り組めていたら OK という観点で評価している部分があるのは否めず，大学体育という科目が大学教育の中にある意義をはっきりと打ち出すためにも，ルーブリックなどを用いた評価基準の作成やその運用は，今後ますます必要なものと思います。まだまだ不勉強なため，多くを勉強させていただきました。もし機会があれば，大学の DP とのかかわりや，体育または健康スポーツ系科目としての DP とのかかわりから，どのようにルーブリックを作成されたのかなどの事例的なお話をお聞きしてみたいと思いました。今日はありがとうございました。

---

ルーブリックについて勉強させていただきました。ありがとうございました。
個人的に作成し活用してみようと思いました。

---

他大学の状況を知ることができて良かったです。ありがとうございました。

---

勉強になりました

---

これからの大学体育教育において、一石を投じるシンポジウムだったと思います。ループリックによる評価については、一気に共通した評価となるルーブリックを作り上げるには、まだまだ情報や実績が少ないと思います。まず個々による取り組み実績を積み上げて、それらを検討・分析することから始めてみることが一案かと考えました。
大変興味深いテーマのシンポジウムでした。ありがとうございました。

---

ルーブリックの必要性、有効性は理解できますが、体育実技、身体活動、特に特定の種目の授業でルーブリックを作成して適用させるのは、やはりまだ難しさを感じています。何をど

のように評価するのか、それを適切に設定することは非常に難しいと思います。シンポでいくつかの事例が紹介されましたが、各大学の DP、CP、体育実技授業がどのように開講、展開されているのかによって、変わっってくる部分も大きいと感じました。大学体育には学習指導要領はありませんので、各教員（あるいは大学や体育組織）が主体的に設定すべきことであり、評価に関する説明が論理的にできるのであれば、それがルーブリックという形態でなくとも構わないような気がしています。あるいは、ものすごくシンプルな目的、目標設定によるルーブリックでもいいような気がしました。評価は合否だけでも・・・という話も出ましたが、それも一考に値すると思いました。

---

今回のシンポジウム、大変勉強になりました。ありがとうございました。一言に教養科目の体育の評価といっても、必修 or 選択科目、種目の選択肢の有無と種目特性、科目担当者選択の有無、など、学生がどのような条件、状況で体育実技を受講しているかは、学校（及び学部や学科）によって異なっていることがよくわかりました。そのため、今回のように事例を紹介し合いながら、取り入れられるところはチャレンジしてみて、試行錯誤しながら作り上げていくことが必要なのではないかと思いました。大変ではありますが、体育もルーブリック評価が必要であり、これにより体育科目の意義を表しやすくなると考えております。今後とも宜しくお願いいたします。

---

お世話になりました。
大学体育の目的も各大学によりさまざまであろうかと思います。
その目的によっては、学生に優劣のつく評定が必要なのか？ルーブリック評価が適切なのか？
そもそも、我々はどんな学生を育てたいのか？目標設定は間違っていないのか？
いろいろ、考えがぐるぐるしています。
今回のシンポジウムは混沌のまま終了した感があります。
この状況も含めて、村山先生がおしゃっていた大学教員のトレーニングとしても必要であろう、とのことは合点がいきます。
さらに、問題点を整理して、次回のシンポジウムに期待したいと思います。

---

ありがとうございました。他大学での様子がよくわかり大変参考になりました。

---

ディスカッションの時間をもう少しもうけて欲しかったと感じました。実践されている先生方の発表はルーブリック肯定派の方々かと思われます。否定派（導入困難派）や導入を検討しているが至っていない先生の発表などもあると、多面的な立場から主張が聞けるので今後期待しています。

---

この度は興味深いご発表をありがとうございました。これまで私自身が実践してきた評価方法について、あらためて考える良い材料を頂きました。”体育実技の目的と評価にルーブリックの活用は適しているのでしょうか。”

慶應義塾大学体育研究所・(公社)全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム

# ルーブリックの活用から体育実技の目的と評価を考える

**開催日時：2022年12月10日(土)15:00～17:00**
**会　　場：慶應義塾大学日吉キャンパス スポーツ棟（ハイブリット開催）**

公益社団法人 全国大学体育連合

## シンポジウムの趣旨

**コーディネーター：村山光義（慶應義塾大学体育研究所）**

本シンポジウムは、公社）全国大学体育連合関東支部の支援を得て、大学体育および大学教育に関する今日的課題を議論する場として、2014 年より開催して来た。コロナ禍を迎え、社会および大学には多くの変化が生じ、大学体育の現場も幾多の困難を経験した。そうした中、昨年度（2021 年度）は「オンライン（遠隔）体育実技における成績評価を考える」というテーマで、成績評価方法の実態調査を基に議論をした※。そして、以下の課題が見えた。

1. 大学体育における「アセスメントポリシー」としての「評価の厳格化」という点から組織的取り組み・教員の裁量・観点の比率の公開などに課題がある
2. オンライン授業における体育実技の目的と評価の関係について議論することが重要である

これらの課題を基軸として、本年度も引き続き議論の場を持ちたいと考える。体育実技授業における目的と成績評価の視点から、「形成的評価」としてルーブリックやポートフォリオの活用が、例えば、中等教育の現場では重要視されている。そこで、本年度は「体育実技の評価におけるルーブリック」の活用を鍵として、ポストコロナを見据えた大学教養体育の使命・役割（目的）とその評価の在り方について議論を進めてみたい。体育実技の形成的評価としてルーブリックをどう捉えるか？この議論は重要であると考える。そして、その議論を深めつつ、大学において評価の厳格化を進めるプロセスと大学体育の目的や学修成果の関係性について考え、さらには、ポストコロナの時代の大学体育の意義や責務を探っていきたいと考える。

※昨年度のシンポジウム内容は以下のリンクよりご確認ください。
リンク先：「2021 年度 慶應義塾大学体育研究所 基盤研究報告書」

## シンポジストならびにテーマ

### 1.『大学体育実技授業におけるルーブリック活用に関する調査報告』

**東原綾子（慶應義塾大学体育研究所）**

要旨：大学体育、特に実技におけるルーブリック評価については、認知度・活用実績・検討事例などの点で情報が十分ではないのが現状である。そこで我々は、全国大学体育連合関東支部においてルーブリックの活用事例についてアンケート調査を実施した。その結果、大学体育実技におけるルーブリックの活用例は少なく、今後の取り組みついても積極的な意見と消極的な意見、難しさを指摘する意見など様々であった。本発表では調査結果の概要を報告し、体育実技授業におけるルーブリック活用における現状を共有する。

略歴：東原綾子（ひがしはらあやこ）　博士（スポーツ科学）
慶應義塾大学体育研究所 助教
早稲田大学大学院スポーツ科学研究科 博士後期課程修了
専門はスポーツ医学. 実技担当種目はソフトボール、テニス、フットサル

## 2.『体育実技におけるルーブリック案の作成と試行 ～現状と課題～』

**長谷川望（東京家政大学家政学部）**

要旨：本学体育実技は、共通教育科目として複数教員により様々な種目（全42クラス）が展開されている。そのため、評価について共通の基準や内容と教員固有の課題の配分を示し成績評価を行ってきた。しかし、評価基準や観点の違いが話題にあがるケースがあった。また、コロナ禍でのオンライン授業において成績評価について試行錯誤をしてきた。さらに、対面授業が再開し、改めて評価基準や評価の厳格化について、議論がなされてきた。そのなかで、統一の評価基準としてルーブリック案の作成や試行をしている。その葛藤や難しさを共有し、議論することで今後の大学体育実技評価及び大学体育実技の意義について再考する機会としたい。

略歴：長谷川望（はせがわのぞむ）　修士(スポーツ健康科学)
東京家政大学児童教育学科　特任准教授
中京大学大学院 体育学研究科 体育学専攻 博士課程単位取得後退学
専門はスポーツ心理学、女子サッカー

## 3.『ルーブリックの運用にみたロードマップ』

**前鼻啓史（目白大学心理学部）**

要旨：高等教育におけるルーブリックの活用について、不透明な部分が多く見られる実装から結果にいたるまでの道程（ロードマップ）について報告する。学説としてあげられるルーブリックの性質および評価に関する概観を示すとともに、一般体育科目での導入事例をもとに成果の一部を報告する。今日の高等教育界の実情を俯瞰しつつ、ルーブリック導入におけるタスクや懸念事項についても議論を深めていきたい。

略歴：前鼻啓史（まえはなひろふみ）　博士（スポーツ健康科学）
目白大学　心理学部 心理カウンセリング学科　専任講師
順天堂大学大学院 スポーツ健康科学研究科 博士後期課程 修了
専門はアダプテッド・スポーツ科学

## 4.『大学体育実技におけるルーブリックの活用とアセスメントのあり方』

**佐藤豊（桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部）**

要旨：初等、中等教育では、体育実技を含む体育科・保健体育科は、学習指導要領において12年間にわたり2年間ごとに、「知識及び技能」「思考力､判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの資質・能力に応じた体系的な指導内容が示されている。

各学校では、年間指導計画に従い、単元ごとに指導内容を重点化し、単元計画では、診断的評価、形成的評価、総括的評価をスパイラルで繰り返しながら、指導の充実と学習者自らの成果の確認という二つの側面から成果保証を図る装置が、「指導と評価の一体化」と言える。

例えば、技能であれば、この単元でターゲットとする動きの様相としてのスタートの仕方、中間疾走の仕方等を指導内容とし、その動き方や高め方の知識をもとに、身に着けた動きの実現状況をフィードバックするための質的な指標が「評価規準」として用いられており、「評価規準」の実現状況を「十分満足と判断される状況(A)」、「概ね満足と判断される状況(B)」、「手立てを要すると判断される状況(C)」として明示したたものがルーブリックと考えられる。

各大学での体育実技の位置づけは、各大学のディプロマ・ポリシーに従い、カリキュラム・ポリシーが定められており、さらに具体的な指導内容が設定されると考えられるが、技能以外の資質・能力の育成がより重点となるとも考えられる。

本シンポジウムでは、初等・中等教育で20年以上にわたって進められてきている「指導と評価の一体化」についての情報を共有するとともに、大学での体育実技に求められる意義や目的の視点から、指導内容及び判断の目安としてのルーブリックの在り方について検討したい。

略歴：佐藤豊（さとうゆたか）　修士（教育学）
横浜桐蔭大学 スポーツ健康政策学部 スポーツ教育学科　教授
横浜国立大学大学院教育学研究科 修士課程修了
専門は体育科教育学、スポーツ教育学